角川文庫
—2996—

わが良き狼（ウルフ）

筒井康隆

角川書店

昭和四十八年二月二十日　初版発行
昭和五十年一月三十日　六版発行

定価は、カバーに明記してあります

角川文庫

わが良き狼

著作者　筒井康隆
発行者　角川源義
印刷者　村沢達弘
東京都港区新橋四ノ三十ノ八

発行所　東京都千代田区富士見二ノ十三　株式会社角川書店
〒一〇二　振替東京一九五二〇八
電話東京(263)七二二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan　旭印刷・大谷製本
0193-130504-0946(1)

わが良き狼（ウルフ）

他八篇

筒井康隆

角川文庫

2996

目次

地獄図日本海因果（だんまつまさいけのくろしほ） 五
夜の政治と経済 四一
わが家の戦士 七一
わが愛の税務署 九九
若衆胸算用 一二八
団欒の危機 一五三
走る男 一七六
下の世界 二〇三
わが良き狼（ウルフ） 二三三
解説 田辺聖子 二七四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

地獄図日本海因果（だんまつまさいけのくろしほ）

巻之壱

煙も見えず雲もなかった。

日本海の空は晴れていた。

対馬海峡で演習をしていた海上自衛隊呉地方隊の護衛艦「しらくも」の甲板で、ぼんやりと海士たちのアスロック投射訓練を見ていた小花戸二等海佐は、やがて向きを変え、うんといって背のびをしようとした。その時、彼の目に、北北西の海上――水平線まじかにただよう数個の黒点がとびこんできた。

「おい。長幡三尉、ちょっと、こっちへこい」と、二佐は叫んだ。

「はい。なんですか」若い長幡三尉が、二佐のかたわらに駆けよった。

双眼鏡で彼方の黒点を睨み、その双眼鏡を三尉に渡しながら、二佐はいった。「あれを見ろ。気を静めてな」

「はあ。なんでありましょう」
三尉は、こころもち蒼ざめた二佐の黒い顔を、いぶかしげにちらと眺めてから、北北西に双眼鏡を向けた。
「見えるか」
二佐はふるえる声で、そう訊ねた。
「はあ。よく見えます。いい双眼鏡です」
「双眼鏡はどうでもよい。何が見える。いや、あれは何だと思うかね」
「はい。あれはその、いわゆる、船です」
「船であることはわかっている」
「軍艦のようですな」三尉の声も、しだいにふるえはじめた。「すごく小さい船ですが、韓国の武装船なんかでないことはたしかです。小さな——すごく小さな軍艦です」
「そうだ」二佐は、落ちつきをとりもどそうとするかのように、わざとらしく重々しくうなずいた。
「あれは高速魚雷艇だ」
「高速魚雷艇」三尉は目を丸くした。さらに双眼鏡をのぞきこみ、艦数をかぞえはじめた。
「七……八……九……」
「あんな魚雷艇は、日本の海上自衛隊は持っていない。また、韓国も持っていない」

「十四……十五……十六……」
黒点は、ますますふえはじめた。
「十八……十九……。あっ、でかい奴も一隻います。わっ、あれは駆逐艦です」
「旗が見えるか」
「見、見えます。上下の横線が紺、まん中の部分が赤。赤のなかに白丸。白丸のなかに赤い星」
「では、わしの見まちがいではないのだな」二佐はそういって目を閉じた。それから、すぐに目をかっと見ひらき、三尉を頭ごなしに怒鳴りつけた。「なにをぼやぼやしとるんだ。早くCIC室へ行って報告してこんか」
「は、あの、あの……何を……」
「防衛大学で何をならってきた。何もかも教えてやらにゃならんのか。北朝鮮海軍の駆逐艦一隻を旗艦とする魚雷艇二十隻よりなる艦隊が、日本領海へ侵入してきているのだぞ。しかも高速で南下中だ。ただちに地方総監部へ連絡するんだ。それから海上保安部へも連絡だ。それから奴らに」
彼は顎で北鮮艦隊を指した。「ただちに領海外へ退去するよう、手旗と通信機と信号機を使って勧告するんだ。わかったか」
「はいっ」

三尉はＣＩＣ室へすっとんでいった。

二佐は、急速に接近してくる北鮮艦隊を、大きな目で凝視した。

「奴ら、なんのつもりだ……」

北鮮艦隊が日本へ攻めてきた――そんな馬鹿なことがあるものかとは思ったものの、目の前の彼らの行動は、二佐の目には、どう見ても軍事行動としか映らなかった。彼らの隊形は、どう考えても戦闘用の隊形だった。

「砲撃してくるかもしれん」

そう思うと、さすが豪胆な二佐の膝も、小きざみにふるえた。

そうだ――と、彼は思った――もし本当に攻撃してくるのなら、もし本当に北朝鮮が日本へ攻めてくるとしたら、それは今――今以外にはあり得なかったのだ。なんたることだ、なんたることだ、今、今日本には　米軍はほとんどいないのだ。

その通りだった。

この時、横須賀、佐世保などのアメリカ第七艦隊前進基地からは、配置されていた軍艦のすべてがベトナムへ向かって出港していた。また、府中の第五空軍、立川の空輸師団も、沖縄経由でベトナムへ向かってしまったあとだった。

つまり、日本にいた太平洋軍のほとんどが、数日前からベトナムへ出はらってしまっていたのである。

今や二佐は、眼前の北鮮艦隊の持つ、日本攻撃の意図を疑ってはいなかった。

巻之弐

話は数年前にさかのぼる。

その日、朝鮮民主主義人民共和国の首都平壌から、姿なき指令が秘密のルートを通ってベトナム民主共和国の首都ハノイへととんだ。

そしてその直後、北鮮のゲリラ隊が韓国大統領の首をちょん切ると豪語しながらソウル市内に潜入、韓国警察隊と猛烈な市街戦を展開したのである。

さらにその二日ののち、こんどは北鮮元山沖でアメリカの情報収集補助艦プエブロが、北鮮海軍の警備艇に包囲され、捕獲されてしまった。

この時、ケサンの攻防戦に加わる予定だった空母ヨークタウンと、三派系全学連をテレビ・タレントに育てあげてから佐世保を出港し、南へ向かっていた空母エンタープライズは、急遽コースを北にとって朝鮮沖に出動、さらに空母レインジャーも指令を受けて北上した。

かくして第七艦隊の主力は、すべて日本海で釘づけにされてしまうことになってしまったのである。

ベトコンの、南ベトナム全土にまたがる一斉攻撃は、その六日後に起こった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

米軍は朝鮮に気を奪われていたし、ベトナムにいた米軍海兵隊の主力と陸軍一個師団、それに南ベトナム政府軍一個師団は、要衝ケサン基地で北ベトナム軍と大攻防戦をくりひろげているまっ最中。

だしぬけの猛攻撃だった。

おりから町はテト前夜、ダナン、ニャチャン、クイニョン、あれは地雷か爆竹か、M1ライフル、手榴弾、思いもかけぬ大砲撃に、肝をつぶしたのは市民たちだけではない。

まさに米軍も南ベトナム政府軍も、すぐには反撃するすべもなき大電撃作戦だったのだ。この時襲われたのは六大都市をはじめ四十三の中小都市、数百の農村、百六十九の軍事基地、三十の飛行場である。

朝鮮の緊迫が、あきらかに南ベトナムでの戦いを、北ベトナムやベトコンに有利に展開させたのだ。

当然この時、「北朝鮮の緊迫は、じつは北朝鮮と北ベトナムが相呼応して作ったものではないか」という説が流れた。

だが、ベトコン一斉攻撃の報をうけて以来あわてっぱなしのワシントンでは、この説を検討している余裕がなかった。片や朝鮮、片やベトナム。ベトコン大攻勢の第一報がはいった夜など、大統領は一睡もしていない。

では、徹夜で頭がぼけていたかというと、そんなことはないので、この時はまだ次期大統領選

挙に出馬するつもりでいた彼は、別のことを考えていた。つまり、朝鮮の局面を自分に有利に展開させてやろうと考えていたのである。

事実彼は、一万五千人の予備役招集という形で封印を一挙にといていた。大統領選挙を有利にするためにはショック療法が必要だったし、このためアメリカの世論も大統領を支持して、戦争を遂行させてやろうという方向へ動いていたのである。

もしもこの時、平壌・ハノイ間の秘密の連絡ルートを、アメリカがもっと力を入れて調査し、それを断ち切ってさえいれば――それはごくかんたんに断ち切ることができたはずだから――その後、北鮮艦隊が日本を襲うなどということは起こっていなかったかもしれない。

だが、幕僚幹部も大統領も、この点を軽視した。彼らはこの事件については、北朝鮮のみの意識的行動と、ベトコンの大攻勢が、偶然時期的に重なったものと結論したのだ。

一九七×年五月――つまり、それから数年後。北鮮艦隊が日本へやってくる五日前のある朝――。

こんどはベトナム民主共和国の首都ハノイから、姿なき指令は秘密のルートを通って北東へとんだ。

その指令はハイフォンからトンキン湾へ出て、海南島（ハイナン）を横目に見ながら南支那海へざんぶととびこみ、抜き手をきって珠江（チュー）河口へ近づくと、腐りかかった海水を全身からしたたらせて香港へ上陸し、町の雑踏へまぎれこんでいった。

と、見るまにこんどは汕頭（スワトウ）の沖あいにあらわれ、華僑のみかん船に乗りこんで台湾海峡を巧みにすり抜け、福州（フーチョウ）の数キロ北、貧しい漁民の家と見せかけた中継地点でひと休み、やがて陸地を北上して西湖（シーフー）の風光を愛でつつ杭州（ハンチョウ）を通って上海へ。上海を全速力で通り抜けるはずみに勢いあまって揚子江へどぶん。えい面倒とばかり、そのまま長江口から東支那海へ泳ぎ出て黄海を北上、青島（チンタオ）の東、山東半島の突端にしばしすがりついてぜいぜいあえぎ、またもや西朝鮮湾に身をおどらせ、朝鮮民主主義人民共和国に上陸、首都平壌にはいって、きょときょとあたりを見まわし、ついに目的地、平壌放送局屋上にそびえ立つ軍用指向性アンテナの先端から、するり受信機のなかへすべりこんだ。

、指令が平壌に到着した直後、北ベトナム政府軍とベトコンの、南ベトナム全土にたいする一斉攻撃は、はじまった。そしてこの攻撃は、ベトナム戦争はじまって以来の、猛攻撃だったのである。

たび重なるパリの平和会談は難航に難航を続けていたため、この時点では、まだ何ら解決の緒口を見出してはいなかったのだ。

巻之参

護衛艦「しらくも」の艦橋から、小花戸二佐は、演習中の呉第一掃海隊群、二十隻の護衛艦に

向けて指令を発した。

「掃海演習中止。ただちに警備態勢にはいれ。北北東の仮想敵に対し、ＭＪＱ隊形に散開せよ」

これだけ奴らの意図がはっきりしていても、まだ仮想敵と称さなければならないのか――もどかしさに、二佐は唇をかんだ。手旗や信号機などによる警告にも、北鮮艦隊は何らの反応も見せず、最初発見した時のままのスピードで、どんどんこちらへ近づいてくるのである。

こういう場合、いかに相手の攻撃の意図がはっきりしていても、こちらから攻撃をはじめてはいけないのである。相手を捕獲する分にはさしつかえないが、捕獲しようとして近づいて行けば、魚雷を撃ちこまれることははっきりしている。海上保安本部なんかへ連絡したって、しかたがなかったな――二佐はそう思った。

「て、て、敵はだんだん、近づいてきましたっ」長幡三尉が、口の端を頬へ吊りあげて、そう叫んだ。

「そんなことは、見ればわかる」と、二佐はいった。「なんだその顔は。見苦しいぞ。それより、総監部からの指令はまだこないか」

「はい。まだきません」三尉は全身を小きざみに揺すりながら――つまり、ふるえながら叫んだ。

「こ、こ、攻撃はしないのですか。こちらから、攻撃したほうが得です」

「損得の問題ではない。だいいち、まだ敵ときまったわけではない」
「でも、敵……仮想敵は次第に近づきつつあります。仮想敵は小型の魚雷艇でありますから、こちらは、近づかれれば近づかれるほど、不利になります」
「いわずもがなのことはいうな。こちらから攻撃すれば、戦争をしかけたのは日本ということになる」
「日本」三尉は息をのんだ。「では、では、日本と北鮮とは、戦争になりますか」彼は泣きそうな声でいった。
「ほ、本土決戦になりますか」
「わからん。もう黙れ」
ＣＩＣ室から、報告が届いた。
「潜水艦がいます。今、ソナーにはいりました。一隻です」
「どこにいる」
「この艦の、ま下にいます」
「ひい」と、三尉が息を吸いこんだ。「そういえば、北鮮海軍には潜水艦が一隻だけいました。きっと、そいつです」
「まだわからん」二佐はいらいらして、吐き捨てるようにいった。
「でも、わが軍の潜水艦なら、何とか連絡してくるはずです」

「いや。ソ連の潜水艦かもしれん」

日本海の海底に、ソ連の潜水艦がうようよといることは、これは周知の事実である。ウラジオストクにいるソ連の潜水艦は約百八十隻、これらの艦が出動する時は、当然日本海を通り、対馬、津軽、宗谷の三つの海峡のうちのどれかを通り抜ける。そうしなければ太平洋に出られないからである。

潜水艦ばかりではない。駆逐艦、魚雷艇なども、うようよといるのだ。

事実、こういうソ連の軍艦と、日本の護衛艦が日本海上で出会したことは、かぞえきれないくらいある。小花戸二佐の記憶にある事件だけでも、五つ六つある。

たとえば四十年秋の船団護衛演習の時は、護衛艦四隻が舞鶴を出港、津軽海峡を抜けて八戸の沖をまわり横須賀へ入港するまでの四日間、ソ連の潜水艦救難船がずっとつきまとった。

潜水艦救難船がいるからには、海面下にはきっと、潜水艦がいっぱいいたにちがいない。

また四十二年八月、日本の護衛艦が宗谷海峡を抜ける時、ソ連の掃海艇と魚雷艇にあとをつけられた。

その年の九月、八丈島の近くで訓練中だった護衛艦に、ソ連の駆逐艦二隻とタンカーと測量船が近づいてきた。

また、ある士官は、東京湾沖で訓練中に、「仮想敵浮上せよ」といったとたん、目の前へごぼごぼといってソ連の潜水艦がほんとに浮上してきたため、腰をぬかさんばかりにおどろいた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com